

戦後八十年記録

～語り継ぐ、岩国の記憶～

昭和二十年八月十四日の岩国駅周辺被爆記録（復刻版）

岩国市

はじめに

本年、第二次世界大戦の終戦から八十年という節目の年を迎えます。この戦争を実際に体験された方々が年々少なくなっていく中で、戦没者に対する鎮魂や戦争の記憶を風化させないために、市内各地で慰霊祭が執り行われています。中でも、昭和二十年八月十四日に岩国駅周辺を襲った大空襲では、二、三十分というわずかな時間で五百人を超える尊い命が犠牲となりました。この痛ましい出来事を悼み、「岩国駅前戦災死没者慰霊祭」が、毎年八月十四日にご遺族や関係者の方々により執り行われています。



八十年前、「ふるさと岩国」が焦土と化した当時の悲惨な状況を、戦争を知らない世代にも語り継ぐ取組として、このたび「戦後八十年記録」語り継ぐ、岩国の記憶」昭和二十年八月十四日の岩国駅周辺被爆記録（復刻版）」を発行することといたしました。

巻頭には、昭和二十年当時の岩国での空襲の様子をとらえた写真を掲載しています。続いて、昭和四十五年に岩国市が発行した、座談会形式による「昭和二十年八月十四日の岩国駅周辺被爆記録」を原文のまま掲載し、被爆当時の緊迫した状況を伝えています。巻末では、市内の図書館などで所蔵している、岩国空襲に関する図書なども紹介しています。本取組によって、八十年前に岩国で起きた大空襲の記憶が、次の世代に確かに受け継がれ、戦争の悲惨さや平和の尊さについて考える一助となれば幸いです。

令和七年八月

岩国市長 福田良彦

●空襲前の岩国駅（昭和十五～二十年頃・所蔵Ⅱ岩国徴古館）

岩国駅は、明治三十年に山陽鉄道の駅として開設され、昭和四年に麻里布駅と改称したが、昭和十七年に元の岩国駅に復した。駅前にはバスの発着所としても使用され、昭和十三年にバスが町営化、昭和十五年には市制施行にともない岩国市営バスが誕生し、交通の要として多くの路線の起点、経由地となっていた。



●戦闘機を見送る人々（昭和十年代末期・提供Ⅱ蔵重良江氏）

岩国上空を旋回する身内の搭乗した戦闘機（特攻隊）に向けて、手を振って送り出す人々。海軍は昭和十三年四月、岩国川下で飛行場建設に着手、昭和十五年七月に岩国海軍航空隊が発足した。主として教育隊、練習隊として使用され、零戦搭乗員の訓練も行われた。





●B二十九の爆撃 岩国駅（昭和二十年頃・所蔵Ⅱ岩国徴古館）

終戦の前日、昭和二十年八月十四日に百八機のB二十九が岩国駅を爆撃し、五百ポンド爆弾約六百四十四トンが投下された。『岩国市史 下』（昭和四十六年発行）によると、死者五百十七人、行方不明者三十人、負傷者八百五十九人の被害があったとされている。

●岩国陸軍燃料廠（昭和二十年・所蔵Ⅱ岩国徴古館）

昭和二十年五月十日、百十五機のB二十九が岩国陸軍燃料廠（現在の三井化学岩国大竹工場）を爆撃した。『岩国市史 史料編三』（平成十六年発行）によると、隣接する興亜石油株式会社麻里布製油所（現在のENEOS麻里布製油所）とあわせて三百五十六人の死者が出たとされている。





●岩国駅（昭和二十一年・所蔵Ⅱ岩国徴古館）

明治三十年に開設された岩国駅は、昭和二十年八月十四日の大空襲で全焼、同年復旧したが、翌二十一年に火災で再び全焼した。その後、昭和二十三年十二月に岩国駅主屋が竣工し、平成二十九年からは現在の駅舎が共用開始された。

昭和二十年八月十四日の

岩国駅周辺被爆記録

序 文

昭和二十年八月十四日といえば、終戦の前の日です。その日は、岩国市民にとって、まことに、憶い起こすだに恐ろしく、悲惨な日でした。

装束の陸軍燃料廠や川下の海軍航空隊の被爆に次いで岩国駅前の被爆を最後に終戦となりましたが、その被災の状況は言語を絶する悲惨なもので、各持ち場における市民の皆さんのご苦労は察するに余りあるのです。

当時、事態収拾に当たられた幾人かの方々にその時の模様を話し合っていただき、後世に長く記録をとどめて平和を希求するとともに、不幸にして爆死された方々の冥福を祈る意味でこの小冊子をまとめた次第であります。この記録がすべてではありませんが、岩国市の悲しい一頁と

して皆さんの胸におさめていただきたいと存じます。

おわりにこの企画にご協力くださった関係各位に深く感謝の意を表します。

昭和四十五年八月十四日

駅前被爆の日に

岩国市長 朝枝俊輔

昭和二十年八月十四日の

岩国駅周辺被爆記録

座談会出席者（五十音順）

秋田綱雄	岩国市麻里布町四丁目七の八
井上種三郎	岩国市車町二丁目十三の三十五
沖井磯吉	岩国市元町四丁目五の四
沖重四六	岩国市錦見六丁目十二の八
上林正幸	岩国市南岩国町二丁目七十二の十二
木村数衛	岩国市昭和町一丁目十七の十一
白井一雄	岩国市麻里布町二丁目一の三
末広薫雄	岩国市今津町一丁目十三の十七
高木軍一	岩国市大字大山二四四
田村虎一	岩国市岩国二丁目十八の十五
中村辰之輔	岩国市今津町五丁目八の三

岩国市麻里布町二丁目一の二十一
岩国市麻里布町三丁目十二の八
岩国市麻里布町二丁目一の十八
岩国市室の木町四丁目四の十三
岩国市牛野谷町三丁目十二の三
司会 岩国市助役

西本茂一
野田喜代一
三上幹利
福本巖
元島英三
伊藤正一

座談会記録

○司会（伊藤） 先般、ご案内申し上げましたように、昭和二十年八月十四日の駅前被爆に関係する資料を集めるという目的で、本日の会を持った次第であります。実はまだお見えになつておりませんが、田村虎一元助役さんから「八月十四日のことについて記録もなく、だんだん当時の関係者としても記憶が薄れていくから、一度よく知っておられる方々が集まって、座談会でもやりながらその記録をとめるといふようなことをしてはどうか」ということを朝枝市長のほうに申されました、市長から「それはいいことだ、さっそくそういう催しをするように」という命令を受けまして、そのほうでいろいろ準備しておったわけでございますが、たまたま本年度から岩国市史の増補改訂と言いますか、この準備にかかっております。それに関連しまして、たまたま今日がその八月十四日の一か月前でございますが、この催しをすることによって、当時を回顧するということとともに、当時の記録を取りたいというのが念願でございます、今日は一つ気楽な気持ちで、いろいろ思い出していただき、なお本日の会合をもって終わりにするのでなくて、先程の白井さん、三上さんからも、この人が詳しいことを知っておられるということで、お話がありましたように、逐次正確、詳細な資料をつくることが、実は目的でございます、お忙しいところを本日ご出席いただき、心から感謝申し上げる次第でございます。なお、おそらく本日の

会合の席で出ましたのを足がかりに、将来こういう会を開く、あるいは本人のところに行ってお聞きすることになるかと思いますが、基本的なことは本日いろいろ出てくると思いますが、一つ今後ともそれを参考にさせていただきたいと思っております。いずれ田村さん、高木さん、西本さん、その他お見えになるかと思いますが、一応十二時までを予定しておりますので、始めさせていただきたいと思うわけであります。記録に残す関係もありまして、ほんの一二分ずつ一つ秋田さんから、その当時自分はどのようなことに携わっておったかというのを、自己紹介と言いますか、これは皆さん同志の自己紹介というよりも、記録にとどめるための今後のいろいろの発言との関連で残しておきたいと思しますので、大変恐縮ですが時間の方は短く、一応当時どういう職場、あるいはどんな仕事をしておったかということに対して、自己紹介をかねて秋田さんから順番にお願いいたします。

○秋田 私 は当時十四日の日に市役所の振興課というところにおりました。爆弾が始まるのが何時でございましたか、ちょっと覚えておりませんが、前の庁舎の二階でございましたので、駅のあたりがよく見えるんです。こちらの窓からのぞいておりました。そうすると爆弾がどんどん落ちてくるんです。皆散り散りばらばらに隠れておりましたが、私は平気で窓からのぞいておったのですが、だんだんひどくなるものですから、それでは防空壕に入ろうかということが入りました。そのとき丁度皆さんがおられ、非常にふるえておられるようでしたから、波羅蜜陀多心経という

のをあげたらしいということで、その防空壕であげました。そうすると皆さん落ち着いてきて、防空壕から出たわけでございます。

この爆弾のあった当時は、助役が田村さんですがいまこの席においでになりませんが、駅あたりでたくさん死体が出て、どんどんこの前の青物市場に運びました。こちらの新しい庁舎も建設中でありましたが、その中もいっぱいでした。それから翌日のことでしたが、人絹の今の東中学校、小学校のあたりに、たくさん死体が転がっているというので、それを焼きに行かなければならないことになりましたが、そのとき田村さんは率先して行かれたのです。

私たちも油を持ってどんどん焼いて行きましたが、この戦災では何といっても田村さんが、殊勲者ではないかというように考えました。そのほかたくさんございますが、時間がきたと思いますので、そのぐらいにしておきましょう。

○上林 上林でございますが、実は先般、今日のご案内をいただきましたときに、八月十四日の被爆、あるいは人絹の爆撃、そういったものには当時応召しておりました、よくわかりませんが、出席するのはどうかということを上上げたのですけれども、私当時の仕事が防空関係の一応の権限を持っておりまして、応召前いろいろ防空訓練なり、そういったものをやってきておりましたので、朝鮮においてその爆撃を知って、大変残念に思ったものです。応召から帰りまして岩国駅の現実の場面を見て、被爆の悲惨さを思い、案外、皆さんからいろいろ当時のことをもって

詳しく承るといのは、何かの参考になるのではないかと、また私防空訓練等、しばしば駅前で行りまして、その方々がなくなられたということにつきましては、毎年駅前で行なわれております慰霊祭には、必ず参列させていただき、霊を慰めておるといような立場で、今日この席に出していただいたようなわけで、案外関係のない者かも知りません。こういう次第であります。

○井上 私は、十四日の朝は丁度広島から帰ったところだったのです。といいますのは、八月八日に県庁からの命令によって、原爆の落ちたところに応援に行けということ、岩国市から医者二人、岡本さんが会長で、沖井さんが副会長、それから看護婦さん八人、それに私の十一人で行きまして、それから一週間ほどたって十四日の朝八時に岩国市に着いたのです。それから岩国駅で解散し帰庁して、この二階に上がり、帳簿の整理をやらうと思ってやりはじめたときに、西からB二十九爆撃機がやってきた。それから二階に最後まで残ったのが三人、ご存知の福本さんと秋田さんと私の三人だけ残って、机の下に隠れましたが、その後のことは、私よりもこの福本さんが、全部記憶しておられるし、書いてもらえますから、それではっきりわかるのじゃないかと思っております。

○司会 全体的な戦況に関連した状況については、また一通り紹介が終わりまして入って行きたいと思しますので、先程申しましたような形で逐次自己紹介をしていただきます。

○中村 私中村でございます。私はその当時は帳簿の整理をしていた。それを金庫に納めて金庫

の一部にキーをかけて、外側を締めたときで、キーは手かけずこのとき私が一番遅かった。それで第一波が来た時は丁度炊事場の辺におって、他に二、三おったと思うが、そこから出て、前の防空壕には人がいっぱいいるし、それで水道の防空壕をのぞいて見ると、これも入りきれない、そこで金沢さんと加藤さんの三人が、市役所の北のすみに三尺くらいの穴を掘って、それに三人で入っていた。それで金沢さんと加藤さんがすぐ出て、どこか山のところかどこかに行かれて、私は出て新館のほうに隠れられるところがないか行きかけたが、人はだれもおらないしとうとう最後まで、そのあたりに隠れておったわけです。田村さんですか

○高木 私高木でございます。私は当時水道のほうの世話をさせてもらっておったのですが、丁度水道課の事務所の東側に大きな防空壕があって、これは水道課のもので、頑丈なのをつくっておったわけです。それで空襲になりましたから、すぐ水道課の全員が入って、ほかの課の方も大分入られたのですが、入っておったところが、だんだんこも危いというので、大部逃げられた。最後に残ったのが五、六人でした。空襲が終わってから、水道課の事務所へ行ってみたがだれもおらない。そのうちにだんだんと帰ってきましたので、市内の排水管の状況を調べてこいというので、調べさせたわけです。そして今津の浄水場が無事であるということがわかったので、今津町だけその晩から給水を始めまして、ほかは全部断水しました。そういうような状態でございます。

○福本 私福本でございます。当時、私は厚生課長でございました。厚生課の仕事は大ざっぱに記録に取ってありましたのでございますが、その課では主任が中村さん、衛生のほうの主任が井上さんと、まあこういったお二人が中心になってやっておられたのであります。先ほどから話しておられますが、振興課におられた秋田さんが、非常によく私のところの仕事のお手伝いをして下さったことを、いまだに私記憶にとどめております。それと先ほどおっしゃられたわけですが、大島さんがやはり私の課で働いておられました。当時は少しからだが弱かったのですが、いろいろとお力添えいただきましたので、これも頭の中にあるのでございます。要するに、私は死体のほうの関係でございましたので、死体を処理いたしまして、火葬にしたのは、私が岩国市で一番多いのではないかと考えております。相すまないと思っておりますし、またこれらの方々のご冥福は、常々心からお祈り申し上げておるのでございます。当時は先ほど井上さんもおっしゃいましたが、私どもの課は二階にありまして、空襲ということで、ほとんどの方が階下におられました。私は課の責任がありますし、なるべくあとを良く整えてということで、最後まで残っております。秋田さんが残っておられたことは記憶にあります。それから、井上さんは当時広島へ出張されまして、帰られたすぐで「どこにおるのも同じことだ、同じ死ぬるのならここで」といって、机の下から動かれなかったことは記憶にあります。聞けば秋田さんがどうでもというので、下に降りられたというのですが、役所の前の防空壕に入りまして、私も最後に入ったのです。

が、開き戸がパタンパタンとあいて仕方がないけれども、それを締めに行くのも恐しいくらい。皆さんだれものぞかれないような形でございました。そのほかいろいろなことにつきましては、後ほど申し上げたいと思いますが、死体処理の関係では、先ほどからいろいろ出しましたが、田村助役さんが主任となって、非常にお力添えをいただきましたので、厚生課の仕事が割合にスムーズに行ったということをつけ加えまして、当日の私の担当の話を終わります。

○木村 木村でございます。いろいろと皆さんから参考のお話を聞かせていただきました。その当時、私は丁度人絹の自治会長をやらせていただいておりますが、その当時も丁度（その当時は「自治会」ではなかったのですが、）町内会長として、夜は夜で防空のほうで出て、演習をやったりしておりました。その当時は今と違ひまして、町内会長としては、市の全体のご指示により、事務員を一人おきまして事務をとらせておったのですが、丁度爆撃がありましたときに、私の家族は六人でしたが、妻子は大竹の奥に疎開をさせて、私は町内会長をやっておる関係上、外にも出られず、何かあるかわからないということで、一人がずっとがんばっておったわけでございます。当日丁度西岩国へ用事があって、行かなければならないことができて、自転車で西岩国へ行く途中、丁度桜地蔵のところまで行ったら、B二十九の爆撃があるから、防空壕に入れということで、丁度福本さんの前あたりの防空壕に入っていたのですが、外の様子を知りたいから、外へ出ようと思ったら、今出てはいけない、今岩国駅が爆撃されている。そうして人絹町も爆撃され

ているということで、私も穴の中に入っていたが、どうすることもできない。何とかして早く帰って、皆さんを何とかしなくてはならないと思ったが、丁度兵隊がきて出てはいけないというので、じっとしていた。そのうち空襲警報解除になって、穴から出て駅の方を見ると、駅が焼けている。人絹町も焼けていた。帰るにも道路が相当破壊されて通りにくいから、川原を回って帰らなければならぬということ、川辺りを回らして、私のところは焼けても仕方ないが、皆さんはどうだろうかと思ひながら、途中沖井病院のあたりはどうだろうか聞いたたら、沖井さんのところはあつたように思うと言われたりして、ようやくたどり着いて家に帰ってみれば、大分人絹町が焼けていたので、私の家にはだれもおらないが、どうなっておるのかと、そのときには、私は生きている心地がしなかったのです。丁度沖井さんのところに行つたら、沖井さんも無事、私のところも無事でしたが、西側は爆撃で、そのときも焼けていたのですが、格別に消しにこられる様子もないし、焼け放題だったのですが、これも仕方なかったと思います。それから私は沖井先生のところに、ご相談に行つて、話によれば、また今晚空襲があるということだから、室の木の上に避難させてはどうだろうかということで、沖井先生と相談のうえ、そうしましょうということで、室の木の上へ連れて行つたのですが、まあ幸いにして夜は、爆撃がなかったものから、私はその晩に帰り近所を見回りましたが、皆避難しておられるということで、安として一人で沖井さんのところに行つて、色々相談しました。そういうことで、随分あの日の爆撃には、

沖井先生にも非常に心配していただきました。今は人絹町も相当大きいですが、その当時は戸数も少なく、ほかに病院もないものですから、もし負傷者でもあれば、沖井先生に看護婦さんもおられたのですから、出て下さいと言って、沖井先生も非常に心配して快諾いただいた次第です。そういうことで、その日は済んだようなことでございまして、ほんとうに今思ひ出すと、私はぞつとするのですが、白井さんも来ておいでになります、駅前の方には相当ご迷惑をかけたと思います。それから二十年以上たったのですが、何とかあの日の記録を残して、これからの励ましの何かにしたいと、常に思っていたのです。そういうことで終わります。

(田村さんが来る)

○司会 田村さんどうも有難うございました。ただ今当時の状況のうちで、特に自己紹介を兼ねて、自己紹介と申ししましても、記録の上にとどめる自己紹介でございまして、当時の自分の職場なり、仕事なりを、どういう職場であつたかを、お話ししていただいております。それでは沖井さん続いて……。

○沖井 皆さんご苦勞なさつて、いまご存命でおめでたいというほかはないのでございます。私は現在の場所に住んでおりまして、当時田村さんが、警防団の団長で、私が副団長をやつており、私も医者という立場で、外泊あるいは疎開を禁じられておりまして、特に外科ですから、非常に事故あるいはそういうものに対して、警戒と覚悟はしておりました。それで当日は看護婦五人と、

家族六人爆撃の瞬間には、防空壕に入ったのですが、そのきわまで、われわれは診療に携わっておりました。私は、そのときは田村さんの下で、警防団の副団長をやっていたので、町を見て回らなければいけない、それで人絹の元駅通りというのは、古いのがありましたが、そのあたりも家が崩れて、足をはさまれたり、あるいはいまの元町の二丁目のあたりで、火が燃えているが、それを私がどうこうすることはできないから、一応見て回ることになりました。それから帰って見ると、けが人はおるし、家は初め一発ドカンと大きな音がしまして、ガラスがほとんど全滅しました。その次にはやはりきますけれども、何も音が聞えなかった。まあそういうことで、診療のあい間に見回りをしておりました。

○沖重 私沖重でございます。当時警防団に所属しておりました、私田村団長の命令を受けて、市役所の隣りに警防団本部を設置して、本部長を勤めておりました。その日は愛宕の方で、午前中に火事がありまして、私は十五人の団員を連れて、愛宕の火事を消しに行きました。その帰りに大編隊が来るものだから、今度は駅前の警戒警報で、駅前に行きましたところ、どんどん爆弾を落とし出したものですから、どうしようもなく退却せよということで、情報本部だけは後にさげて、西岩国に本部を移転しました。消防団の車だけは、こちらにありましたが、火を消すどころじゃない、今度は死体の掘り出しをやれということになりました。死体の掘り出しにかかりましたけれど、どうもこうも手がつけられないので、団長に申し上げまして、警防団を招集してい

ただきましたが、出たものは約半分位でした。当時の仕事はのちほどに報告させていただきます。

○白井 私は八月十四日は命拾いをしたのです。というのは、子供が広島島の八月六日に汽車に乗っておりまして、原爆にあいまして、そういう関係で、家内の里が近くにあるものですから、そこに預けておった。ところが、預けっぱなしではぐあいが悪いということで、お礼方々お伺いしたのですが、久しぶりに行ったものですから、しばらくおったらいわれたのです。実は、十四日の日に岩国の保健所で、看護婦の講習会がありまして、そのほうの試験をやることになっておりましたが、先方からそのように引き止められるし、自分も久しぶりだから、少しゆっくりしようということで、実は多分ここに、野田さんのおいでになろうと思うのですが、その方が玖珂の助役さんをしていらっしやったので、その方に試験の問題をことづけて泊まりました。あくる日の七時の汽車で帰ろうと思いましたが、何分眠たくもあるし、久しぶりでもあるので、まあいいじやないかということで、昼ご飯を食べておりましたところが、ドンドンと音がする、B二十九の大編隊が通っている。そのうちに、これは光の工廠がやられたのではないかと、話しておりました。まさか、岩国が爆撃にあうということは、少しも考えなかった。それにしても、ちょっと不安な気がしてきました。というのは、看護婦を一人、私のところに残しておりました、それがどうかなりはしないかと思ったので、連絡をとりましたが、もち論電話は通じません。これは困ったことだと、心配しておりましたところ、岩国駅が全滅という情報が入ってきて、すぐ帰り仕度

をはじめ、丁度燃料廠に帰るトラックがありましたので、そのトラックに便乗させて貰い帰ってきました。ところが、ご存知のような焼け野原になっており、自分の家に帰って見ましたところが、屋敷の中に穴が五つほどあいている。防空壕のあったところの一坪半だけが残っているというのですね、岩国駅辺は掘るとすぐ水がわくので、防空壕でなしに、掘っ立て小屋を建てておった。それが非常によかったのだろうと思いますが、その上に土が重なる、材木が縦横に重なりまして、中におった四〜五人が助かったという。そのことは、ここにおいでになれる野田さんが、そのときの体験を生々しく、感じておられるだろうと思いますので、野田さんにお聞きになれば、そのときの状況が、よくわかるだろうと思います。

○三上 私三上でございます。その当時、駅前には錦水の蔵重さんが町内会長で、私が配給部長をしておりました。そして、広島は、現在は原爆というはつきりしたことがありますが、その当時、まだそういう明りような爆弾の名前は、はつきりしませんでした。その後、駅前は非常に神経を動揺いたしました。町内会が大体五百人は完全に入るような、大きな穴ぐらを室の木につくりまして、町内会長としても警報がなると同時に、山の壕に入ってくれということをご皆さんに申し上げて、毎日毎日そういうことを繰り返しておりましたときに、十四日の日がまいりました。私たちの日常生活は、全部ゲートルを巻いた装備の服装で、夜寝ておりました関係上、警報と同時に隣の吉野医薬店に、さあ山に逃げまじょうと、きょうは西本の奥さんを是非誘ってと

いう話が出ておりましたので、西本の奥さんを誘ったら、丁度昼飯のしたくをしておるから、先に行っておいてということで、アリコの這うごとく、あらゆる方面から、山に向けてどんどん逃げた次第です。その次は、あの悲惨な爆撃の話になりますが、これは後ほど、記憶にある限り申し上げたいと思います。

○司会 野田さんそれでは今、自己紹介をかねて、当時の特に従事しておられました仕事等をお話し願います。なお、詳細については、また後ほどお願いすることにしたいと思います。

○野田 私は駅前における野田と申します。その当時、私は丁度鉄道のほうに勤めておりまして、その日は丁度非番であつたので、家におりました。毎日毎日やれ空襲それ解除というので、もう私はほとんど慢性になって、あまり恐怖心がなかった。丁度十四日の十一時、その爆撃に会うときに、そのときのラジオで福山または尾道方面に、爆撃するのではなからうかということ、私は、まあまあ岩国のわずかな所にもって、爆撃するようなことはないだろうと、高見の見物でありましたところが、どうも岩国へ向けてくるというので、白井さんの所の簡単な壕に、私は娘と共に避難したのであります。第一回はほとんどその周囲にもって行って、数十発の爆弾が落ちたために、大穴があいたのを私はそのときはつきり見たのでありますが、第二回目の爆撃で、もう全然壕がつぶれてしまった。そのときには、空襲解除となっておったのですが、どうすることもできない。それで、私はこれは生きてるだろうか、どうだろうかと思つて、自分の身をひねつて

みたところが、何の一つけがない。ああうれしいことだと思って、出ようと思ったが、上ががんにがらめ、電柱や家のこわれた壁土やなんかがふさがって、出ることができない。上の方でガヤガヤ話し声があるので、私はこれはだれか助けにきてくれたのであろうと思って、大声をあげて私は救いを求めたわけでありました。丁度「ここに人声がある。まず生きておる人から助けよう」と私の丁度真上を掘っていただいて、ようやく一寸まるみ位の穴があいて、それから光線が入ったので、私はやれうれしやということ、やっと生きたここちがしました。ようやくそこから這いで、室の木の方へ避難した次第であります。そのとき私はなんらかすり傷も受けず、全身無事であった。今の岩国駅の待合所の丁度まん前が、私の屋敷になるが、あの場所で周囲は何十という爆弾が落ちたのに、そこだけ落ちなかったということは、あとから冷静に考えてみると、白井さんのお稲荷さんがあったので、そのご加護ではなからうかと、私はそういう気持ちをもっております。

○白井 白井でございます。野田さんの入っておられた、一坪半の防空壕のところだけに弾があたらなかったというのは、深く掘りますと、水がわくもので、掘って立て小屋になっていた、それが一つ一つ幸いしたのではないかと思います。そういうようなことがありました。

○高木 私高木でございます。私は八月十四日の戦災に関しましては、何も語る資格はないので、きょうは聞かせていただこうと思ってきました。当時、市役所に勤務しておりましたけれども、外見から申しますと、私は八月十四日に限り逃げ出しまして、悪く言えば逃亡兵みだいになった。

実はその前の爆撃は八日でしたか、十日でしたか、川下がやられた時に、二百四十人死者があったと思いますが、その時の死体収容などで、非常に疲労いたしましたので、そのとき私は初めて死体というものを見たのですけれども、腸が二、三メートルも流れ出している。胴体だけで頭も手もない。この頭がこの胴体につくのじゃないか、この手をこの胴体につけとけということ、一つの死体として收拾するという、悲惨なものでした。それを東小学校に収容いたしましたので、引き取り手がないものですから、三日も四日も、あそこに放置されて、百メートルも近くに寄りますと、臭くて近寄れないという状態になった。二、三日ほんとうに夜も寝ずに、その始末をいたしましたので、十三日でしたか、その頃からもう立てなくなって、家に寝ておりました。十四日に爆撃が始まったときに、当時私はやもめで、子供、女の子ばかり三人連れていた。おれはもういいから、防空壕に行くのはきついから、家に寝ているからということで寝ていた。娘が帰ってきて、とにかくおやじをどこか安全地帯に運ぼうという話になったらしい。とうとう、私を引っ張り出して、西駅まで肩に乗せて、玖珂まで汽車で、郷里の南河内に帰ったのは十四日の晩で、十四日は田村さんのほか皆さんに、なにもお手伝いできずに申し訳ないことになっている。あれほどの大きな被害をあとから聞いて、びっくりした。そういうことでございますので、きょうは私お話を聞かせていただこうと思います。何も語る資格はございません。材料もございません。

○司会 それでは次西本さんお願いいたします。

○西本 私遅刻いたしました、皆さんにご迷惑をかけました。

○司会 役職を中心に、ちょっと自己紹介を兼ねて……。

○西本 私はちょうど広島におったのが、六日だったかなあ、それからこれは戦術を変えたな—
—と思って、急いで地下の掘りかえをしました、ピカにただけのことをやらなければならない
—というので、一生懸命やりまして、下に畳を六枚敷いて長六畳にして、中に電気をつけ、扇風機
—まで持ち込んでおりました。それまでに疎開をどんどんやったものですから、私も柱野の駅のと
—ころまで疎開しました。そのときに息子の女房が、疎開がこたえたのか「お父さん腹が痛い」と
—いうので、腹が痛いといっても、ここで寝ているわけにもいかなないので、「あなたは港に行つて
—おいで、あした私は宇野先生を連れて来る」ということにした。それで朝八時ぐらいに先生をお
—迎えして、流産と診断されて、戻ってみれば、兵隊が、中尉だったと思いますが、ホテルの食堂
—で弁当を食べておった。これはあぶないと思って、「あなたがたここでご飯を食べていますが、
—あぶのうございますよ」といって、私も食事をしようとしたところへ息子がスーツと帰ってきた
—のです。そのときには、航空隊の本部から阿品への連絡員に選ばれて、毎日二回ほど連絡役を勤
—めていたのですが、「実は今お母さんが港で腹が痛いというので、宇野先生を迎えに行つた。こ
—れはどうしようもないが、お前にここでご飯を食べさせたいが、ご飯をもっていけ。」というよ
—うなことです、早く抜けて本部に連絡にいけ」というようなことをいった。あとから聞けば、

この寿橋のところまで出たときに、中尉さんが、早くどこかに逃げてください。ということで、
私は食事何もそのままにして、そのときには、家内も壕にいられたのですが、最後に入つて
おりました。そうこうするうちに、入つて十分位かかったか、かからなかったか、上から爆弾が
落ちて、バーンときた。その至近弾でゆきぶられて、電気は消えるし、女子連中と私も、七人
入つておりましたが、非常に危険を感じました。当時の訓練等で、男は必ず爆弾が落ちて、す
ぐに出る外の様子を見るということになっていたので、私は出ようと思ったが、ドアに砂がかか
つて、内から外にはあかない。これではどうにもならないので、片一方のドアのところは、四寸
角が並んであつて、中の一本を持ち上げれば、パツと開くようになっていた。四寸角を三本は
ずしたところが、外から土砂がダダッとする。ここから出られるというので、皆んな出るかとい
うときに、次の至近弾を恐れて、電気は消えてるし、ふとんを引きかぶって、「あんたたち出
てみなさい。」というものだから、出てもとの郵便局、いまは、岩根さんのところになっている。
その、郵便局の所に行こうと思ったら、上からダーと音がするものだから、これはと思つて、
すぐ耳をふさいで、よその軒下に入つた。それが最後で、あとから目がさめてみれば、十二時か
つかりに時計が止まつておったのです。それから、応援隊というのか、警防団の人が、七人位こ
られたのですが、そのときヤアヤアいわれるので、目がさめて何時ですかと聞くと一時でした。
だから、十二時から一時までは、絶対死んだような状態にあつたのです。それから、しばらくす

る間に、港のお母さんの親元のお父さんが見に来て、「まあ待ちなさい。私が戸板を持ってくるから」といつて持ってきてくれたり、そうこうするうちに、私の親元からもきてくれた。私が、あその配水道の上の鉄筋コンクリートの橋の真上に、あおむけになって、倒れていた。これが丁度私が耳をふさいで、かくれておった所から二間半位の所に飛ばされていたことになります。親せきの者が収容所に連れてきた。そういう状態でその記念が、まだこの手に残っている。そのときに軍医さんが、この手をもいだらいいいいましたが、私はもぐのはいやだということ、針を抜いてもらった。七年位はしびれておった。今こういう状態になって、幸いに皆さんのごやつかいになっておる。以上です。

○司会 田村先生を除きまして、それぞれ各自のご紹介を兼ねて、その役職を中心とした簡単なお説明を、いただいたわけですが、先ほど司会がいさつを申しましたように、この場合は、田村先生のヒントなり、ご示唆によるもので、この席をかりてお礼申し上げます。当時の状況につきましては、いかにそれが熾烈なものであるかということの片鱗を、皆さんに聞かせていただいたわけですが、私丁度十一月の四日に、復員して博多につき、その翌日の早朝、岩国駅に着いて、まだ暗い時間でしたが、駅の位置も前と違うし、駅に降り立ってからずい分とまどった記憶があるわけです。ここに当時の航空写真がありますので、後ほどお返ししますが、その後聞いてみると、ものすごい縦断爆撃を受けている。普通野戦では敵の砲弾して落ちた穴の

あとに入れば、同じところにまた弾がくるということはないという。一つのジグザグがあつて、そういうところに入り込むことは、常識でございますが、岩国駅の場合は爆弾のあとの上に、また爆弾が落ちている状態で、それがいかに熾烈であつたかが想定できる。なお八月六日に広島へ原子爆弾が落ち、九日には長崎に落ちたのですが、ポツダム宣言による無条件降服受諾ということが、八月十五日にあつて、その一日前ですから、一応一般的には八月十五日の終戦ということ、当時は予想されはしなかったけれども、結果的に見て、何か余った弾をみんな落したのじゃあるまいかという。縦断爆撃になっておるわけでございます。田村先生から、その当時助役で、かつ警防団長という任務に携わっておられましたので、総括的なお話しをしていただけたらと思います。

○田村 私三年前に、駅前八月十四日戦災慰霊祭のとき、当時の市長、市議会議員あるいは地元の方々が、お集まりになられたのですが、丁度その時にも申し上げたのですが、百年前に四境の役で、小瀬川で毛利藩と非常な激戦があつて、そして小瀬川はほとんど血の川になったという話を子供の当時に、私共のおやじが、当時百姓ですけれども、やっぱり一本刀をもって出たということ、子供ながらに話を聞いておる。それで百年後の今日において、小瀬川の戦いというものが、どんな激戦であつたのか、全然「この時にはこうであつた」という人が、もう百年たてばおらなくなるでしょう。こういうことで、岩国の昭和二十年の爆撃につきましても、今

のうちなら、かなり各方面に、あの当時の事情を知っておる人がある。それで当時の関係者を集めてそれを簡単な記録にして、市に保存するということが、百年後の将来の市纂の参考になるだろうという話を私が二、三年前の慰霊祭の時にしたのである。当時市長も「それはいいことだからやろう」という話であつたのですが、きょうそれがやられたわけですが、当時の状態は、それは全く言語に尽くされない状態で、私としてはその当時、市長は川西の水西書院の西村さんで、もうおつてないし、それから高木さんが助役であつたのですが、これが二、三か月前から病気で入院しておられる。そういう関係でまあ、市の理事者としてはほとんど私一人、同時に警防団長を兼ねておるという関係で、当時は、さっきどなたか話されましたけれども、八月六日の広島原発爆というの、あれがまだ十四日には何であつたかはつきりしない。何でも「白いものがないような」と白いものを着ておれば、いいそうだといいので、シャツからズボン、ゲートルから靴に至るまで、白いものをつけて、そして頭にはやはり何が当たってもいいようなものを、かぶっておつたわけですが、丁度十四日の昼前、これは今はありませんが、ちよつと行つた所に警防の派出所があつた。この町の突き当たりの通りにあつた。私は、あれから約百メートル位、今の「大丸」の辺の所まで行つておつた。ところが、爆撃の第一弾が、駅の前へバーンと落ちて、そして駅前の家は材木だろうがなんだろうが、百メートル位吹き上げた。これは大変だと思つたから、まあ当時は、私共防空学校へも行つておつた経験がありますので、これはなんでも土地のやわら

かい所へ飛び込んで、いかなければ爆風でやられてしまうというので、私はそこから、駅前の方に、三十軒あつたらうかどうかだろうが、それ位なかつたかも知れないが、それでそれら家の間を通つて、裏の田の中へ行つた。ところが、次々と爆弾が落ちてくる。立つておつては危いから、田の中に伏せて、そして爆弾がくるときにはヒューと音がしますから、あれが頼りで、それが鳴つたらすぐ伏せて、やんだら田の中を這うてというふうにして、何度もそれを繰り返すうちに、やつと以前の市役所の裏まで、田の中を這うて行つたのです。ゲートルも靴も白いのを履いておつたけれども、土べたの中で、みんなすつ飛んでなくなつてしまつた。頭にかぶつていたものもなくなつていた。まるで泥猫になつた。やつと市役所へ帰り裏から上がつてみると、市役所がこんなになりよりました。木造ですからね。それから防空壕へはいろいろと思つたが、もう満員でしたわ、入り口までいっぱい。女々でね。もうここにはおれないと思つて、やつぱり道を走らずに、やはりあれは田でしたが、家がずつとありますが、あの田を走つて、丁度あそこに、中央病院とというのが角にありましたね。あのどぶの中に飛び込んで、それは爆風がどこからきても、あたらないということから、あのどぶの中に飛び込んで、どぶの中をずっと這うて、今津のおうかん橋へ、ここならもう大丈夫だろうということで、あそこで泥まみれになつてあがつたのです。そして、そこへ本部長を当時しておつた消防団の沖重君が、警察の署長以下二、三人と一緒に消防団の赤自動車で、ぱつとやつてきて、そして「団長もやられたか」というのが第一声、沖重君が

私にいった。ところが、どこもやられておらんというので、今度あれから道を走って、称光寺という寺へ行った。あの裏に横穴があった。その時に、戸籍がやられてはわからないようになるからというので、戸籍課だけを称光寺へ移した。戸籍課だけを。そして称光寺の裏の横穴へ戸籍の原本なんか置いて、その横穴の中に入ったら、これで一安心。命だけは助かったと思っておったが、その田んぼを何べんかうつ伏せ這い、うつぶせ這いしているうちに前後左右に爆弾の落ちた穴がたくさんあった。ばーんと落ちる、落ちたやつが途中から破裂するのか、落ちて破裂するのか、こんな破片になってたまる。あれでみんなやられておるわけですね。それでとにかく悪運が強かったのか、身に一つのけがもせず、ようやく逃げた。そして結局爆撃が終わって、あの問題ですけれども、その当時私としては、とにかく市役所から警防派出所へ行くまでの、道もないようになっておる。人絹町へ行く道なんか全然なくなっておる。みな爆弾でやられておる。これはやはり道路を整備せんといかん。死体を整理するにしても、何にしても道路を整備しないといけない。この道路の整備と、それから三日も四日も死体をそのままにしておくわけにはないから、その死体の整理を早くやる。この二つが目標でした。具体的な問題については、また後々に話しますけれども、私の最初からのそのような道路の整備と、とにかく人が行かれるようにと……。それから死体を早く、それからもう一つは負傷者が爆風でやられて、手や足、からだ中破片で傷を受けた者がたくさんいる。爆風で死にかけた人がたくさんいる。その負傷者の整理

でした。それについて一番困るのは、やっぱり今は岩国市にはお医者さんがたくさんおられますが、当時若いお医者さんは、軍医にとられて出征しておられる。それで、何百人という負傷者を横山の中学校の講堂まで運んでいった。そういうような負傷者を助けることと、それから死体の整理と道路を早く整備しようということが、私の初めからの計画で、それでみんなに手伝わってもらったわけです。死体は、三日間かかってようやく集めた。それでもまだ四日も五日もして田の中から、穴の中からポツポツポツ死体が浮いてくる。そういうような死体は、ほとんどこの市役所前に青物市場がありました。それに積んで並べておった。今頃のような状態だったならばカメラで一人一人写しますけれども、当時それでもできなかったのも、もし死体の遺族の方が尋ねて来られたとき「あなたの息子は死んでおった」とか「あなたの家庭の人は死んでおられた」ということがわかるためには、何か死んだ人の遺物の一つ、着物を切っておくとか、バンドをとっておくというふうにはしておかないと、あとから遺族が尋ねて来られたとき「あなたの息子はあれじゃないか」といえないわけです。そういうことをみなさせて、あの青物市場へもうはいりきれないから、市役所の木造でここに新館ができたから、それへいっぱい積み込む、それでもはいりきれないという死体。それで結局死体は後にまとめて、市役所の前の白井達夫君の田の一部で畑になっておるところに積みあげて、あそこで焼いたのが百四十幾つあった。木を拾ってきて積み上げては焼いた。それ以外でも田の中であっちこっち焼いたのが、どれだけあるかわかりま

せん。死体のある場所で木を拾ってきては焼いたからですね。あの当時の状態はおそらく、世界で一番激しい重弾爆弾だったと思うのです。駅などはもう建物が全然なく、機関車なんかは、田の中に倒されてしまった。そういう状態だった。具体的な細かいことはあとからおいおいに。

○司会 それで、当時本部長だった沖重さんに大体朝の何時頃から、最初の飛行機がきて、何機位来たとか、それから爆撃が終わったのが、大体いつ頃か、それから出来得れば、飛行機の機種とかもわかればなんですが、その辺のことを一つ……。

○沖重 それがですね。いろいろな記録が本部にあったのですが、終戦と同時に焼いてしまえというので、大部焼いたのであまりはつきりしませんが、結局十一時十五分位から、爆撃が始まりました、初め三機来まして爆撃をせずに引き返した。その次に十四、五機きまして、延べ六十機位きております。それで第二回が一番激しかった。第三回は駅のプラットホームから、人絹町をやりました。第一回は通りをダダーと落としておりました。それが十四、五機。その次に大群が来ました。それで、いま田村団長がちょっと言い落とされましたが、田村団長は今生きておられるのは本当ではない。死んでおられるのが本当です。それが、ここに踏み切りがあります、踏み切りのこちらの田の中で、だれかが逆になって足をバタバタさせている。駆けていってみれば団長がひっくり返って、田の中に頭をつつ込んで足だけバタバタさせていた。それを起こしたのがね。田村団長はそれが記憶にないのか知りませんが、団長は今あるべき人ではない。爆風で飛ん

でいる。頭だけ田の中につつ込んでね。それからさっき野田さんの話がありました、私の所の警防団員が十五人出ております。それで、すぐ防空壕を回るようにというので、すぐ防空壕を回らせて、防空壕で声がするところだけ、みんな掘って歩けというので、掘って歩いてね第一回か、第二回か死体を収容せいというので、やりましたけれども、声がするところだけは掘ったのですが……。

○司会 最後の三回目が来たというのは、何時頃ですか。

○沖重 三回目が十一時四十分ちょっと過ぎておったように思うのですが。

○司会 一回、二回合わせても一時間足らずですね。

○沖重 私の所に防空監視所がありました、その上をずっと通りましたから――。

○司会 そうするとB二十九というのはグラマンですね。

○沖重 ええ、グラマンが先に来て、それからB二十九ですね。それから一番困ったのはですね、厚生課長がおいになります、天皇陛下の終戦の勅語を受けたときが一番困った、われわれとしては、なぜかというですね、丁度十二時にあれは読まれて、終わったらぱったり死体収容者がいなくなりました。警防団全部が帰ってしまいました。

○沖重 今大島に大浜さんといって、その当時警防主任だったのですけれども、その人と警防団の両部長と市役所の人が四、五人、手伝ってもらって死体を収容していたのですが、十二時にあれ

を読まれると同時に、だれもおらなくなってしまった。それで弱ったんです。今の太浜さんも大分泣かされましたが、泣く泣くタンカをさげて、死体を収容したのです。それから団長が「あそこへ集め！」といわれるから、青物市場の裏へもって行って、どんどん重ねて、そしてこちらの死体収容所にあつたものは、広島とかいろいろな人が来られまして、引き取られました。そして名がわからず残つたのが、ずい分ありましたね。それをあそこに集めて、十八日の夕方、六時か七時に火をつけて、それは一晩中燃えておりました。あくる日は、私の方の係りでないから、厚生課の係りで全部一括して、いろいろなことをされましたが、駅前の爆撃位激しい爆撃はほかにありませんでした。私も、戦争から戻りだちですから、気は張ってるしどんどんやりましたが、戦地でも見られないひどい爆撃でした。一番残念なのは、西本さんがおられますが、あの人の奥さんや吉野の奥さんとか、どうしても防空壕にはいつておらないと翌々日になつても、どこにもおられないというので、ずい分警防団が掘りましたが、結局どこへいかれたのか、いまだにその防空壕がわからない。

○田村 あの防空壕には、十六人はいつておられる。

○沖重 いやそうでないらしいですよ。あれは防空壕に西本さんが金をかけて、あまり強固なものをごしらえられたから、防空壕が爆弾の穴にひっくり返って入り、とうとう埋まつてしまつて出ないのでしょうか。

○西本 粉碎したのでしょうか。

○沖重 いや粉碎したのじゃあるまいという話がある。それがね、これじゃないかといって掘つたのですが、防空壕はあるけれど、丈夫な防空壕もあるものですよ。あの中に、いま現在でも。それでね。まあ私はあなたの奥さんもよく知っておるし、吉野さんの奥さんもよく知っている。大体駅前の壕を掘ってもらいましたが、駅前の壕は大体おられた。それでおそらく駅前の壕で、その時分の爆撃で死なれた人は、よその者が多いのですね。地の者は少ない。非常に少ない。

○西本 私は災害にあつて、すぐいなかの親戚に身を寄せたのですが、そのときに親戚の者が、十五、六人ほどおるのですよ。それ等にもいつてもらつて、死骸を捜そうということが出た。あくる日十五日の日にね。そして尋ねてあそこへ、ここへその翌日には爆撃の穴へ、底のほうに水がたまっている。そこへ足だけ上へ浮いている。それをいまの親戚の者がきて、逆子にひっぱり上げるわけにもいかないうようなことを話しているうちに、陛下のあれが耳にはいったというようなことであつさりして、つい捜査をみなやめてしまった。

○沖重 それでね、私が捜査したのは、あそこを二日間、あなたのところの裏のほうからね。それから防空壕が、ここにあつたんだということを案内してもらつて、ずい分捜査したが、結局かけらも出ない。それでさっき野田さんの話にもありましたが、あの駅の前、あそこをずい分捜しました。あそこが爆撃を受けて、私は丁度団長がこちらへくる前、こちらへ出ておりましたが、

消防署で火を消す準備をせんといかんで、その当時消防車は二台、予備車が一台あるが、その予備車はポンプがつまらないのです。そこで、あそこで待っていましたが、とにかくシューといってドンといったら吹き上げる。それから、第一回目ですむだろうと思ったら、もう来ているのでまたバックしないといけないというので、ずい分あそこであせりましたが、結局火を消すどころの騒ぎじゃない。

○司会 それでは福本さんから、一つ当時亡くなった方の数、行方不明の方、あるいは傷を受けた方、あるいはその後の、さっき田村先生からお話があったりしましたが、亡くなった方の処理状況とか、そういうことに関して一つ……。

○福本 この空襲のとき、いろいろ困った例がたくさんございますが、まず最初から申し上げますと、一番困りましたことは、陸揚げ爆撃を受けましたとき、その日の午後さっそく収容いたしましたおりました小学校へ向かっていく予定で、こちらを出たのでございますが、和木へ行く途中で、道路がもうメチャクチャになっておりまして、自動車も行かない。さっき沖重さんもいわれましたが、消防団のかたに非常にご協力いただきまして、油罐を一つほど応急のために、消防車に積んで行きました。途中で道がなくなったので、道を捜しておりますうちに、油罐を二罐とも盗まれましたね。せつかく大事にしておりました油罐を盗られて、応急の手に非常に困るからと思ったのですが、これはやむを得ず、それから、私一人で向こうへ行きかけましたところが、直経

が二、三十メートルもありますような真っ黒い、外から見ると真っ黒かったのですが、中は火の玉でございましたが、それがブクブク浮いて私のほうへ、風のあおりで浮いてくるのです。私は恐しく、すぐ地に伏せたのですが、私の所へ来るすぐ直前から、だんだん上の方へ上がりました。ようやく私は難をのがれたのですが、それから、和木の小学校へ行ってみしましたところが、非常にたくさんの方が負傷されました、背中の中やけどあたりを処置されますのに、油がほしい、油がほしいといっておられました、そういうことで油を失いました、これが一番最初の困ったことでございます。

それから、その次は、今度川下の航空隊がやられました。そうして死傷者を一時東小学校にも収容したのでございますが、東小学校で結局わからない死体、三、四体ほど残りました、当日寝棺は用意しておりましたので、寝棺のまま東小学校へ安置して、もう夜遅くなりましたので、市役所まで引き上げました。ところが、私どもが帰りました直後に、当時土井司さんが小学校の校長さんでございましたが、その方から市役所に電話がかりまして、「厚生課長はあの死体をどうするつもりか」といわれますので、「今日は引き取りがこれないので、今晩は安置していただいで、明日は何とか処理したいから」といいましたら、「いやいや、あんなものを置いたのじゃ宿直をする人がいないから、ぜひどこかへもっていつてくれ」ということで、やむなく日が暮れておりましたのに、車を準備いたしました。当時秋田さんも参加していただいたと思うのですが、

元島さんとそれから四、五人女の人が、大八車へ三人の死体を積みまして、そうしていま母子寮になっておりますが、当時はあそこが隔離病舎になっておりましたので、あそこへ一応移そうというので、積んでまいったのでございますが、夜ほとんど暮れておりまして、道もわからないような状況でした。私が車の後を押しておりますと、手のほうへ血が流れてくる。まだ臭いはしなかったですけども、血が流れてくるというような死体になっておったわけです。それを隔離病舎に、その晩は収容したことがございます。これも非常に職員の方々のご協力というのが、当時はなはだ薄れておりました。非常に困ったわけでございます。

それから今度、この駅前を中心とした空襲を受けましたときには、ほとんど私、大げさようなことでございますが、自分が空襲を受けたほうが、いいぐらいに思ったわけです。これだけ空襲を受けると、死傷者の処置というのが大へんなことで、非常に苦心をいたしたのでございます。ここにいらっしゃいます田村助役さんが、先ほど承りますと、非常なご災難をお受けになったそうでございます。当時市長さんは全然ご出勤がなく、十四日以後十五日からの死体処理につきましては、私になるべく早くと思ってお勤しますと、すでもう田村助役さんは出勤なさって、当時は庁舎の東側に水道課の新しい庁舎がありましたが、その石段の中ほどに、いつも田村助役さんは立っておられました。さつき沖重さんがおっしゃいましたように、陛下のおことばを承りましてからは、死体処理なんかについて全く「課長なんかの命令などくそくらえ」といったような

ことで、働いていた方が少なかったのでございます。仕方がないので、私は泣き泣き田村助役さんの所へ行つて「助役さん人が少ないのですが」といって毎日毎日お願いいたしましたのでございますが、さつき申し上げましたように、助役さんは必ず出勤時間前に出勤されて、あそここの石段に立って「きょうはだれとだれがどこへ行くのだ、道路の問題とそれから死体処理の問題、死体処理については、厚生課長にこれだけがついて行け」というので、まず大体二十人程度私は要望申し上げました。当時はいままから申し上げますと、申し訳ないと思いますが、死体もすでもう三日もたちますと、丁度暑いときではございますし、臭くなっておりますし、まあ私共としても相すまないことですが、犬の子を処理するような気持ちにならなければならぬのでございます。鳶口をみんなかついで死体処理に向かったのですが、その途中で陸軍燃料廠の中に物資が、砂糖とか、ジュースとか、いろいろなものがあるので、これを早くもって帰れというような命令が出たらしいのでございます。私共が鳶口をかついで歩いて行くときにトラックが通ります。そのトラックに聞いてみると「いまから陸軍燃料廠のほうに砂糖をもらいに行くんだ」といわれるものですから、せっかく二十人を加勢にいただいたのですが、いつのまにか四、五人ぐらいになってしまった。あとの人は、みんなもうトラックに乗って砂糖処理のほうへ行かれたのです。結局私どもが駅に着きますと、四、五人ぐらいいしかおらない。それから駅へまいりまして、死体を処理いたしますにしても、そのうちに雨が降ったりして、大きな穴の中に水が出て

おりました。そして水の中に死体が浮いておるのを、かつぎ上げては、中に吸い込まれないようにしては、かつぎ上げて処理をする。これも初めのうちは、その青物市場に、それから新庁舎へ死体をもって帰っておったのでございますが、消防団の人もほかのお仕事のために、厚生課だけで処理をしなければならないということになった。タンカで死体をいちいちこちらへもって帰ったのでは、あとに残る人がいないというので、私も四、五人のものが、申し訳ないながらも、死体を三、四体ずつ一か所に集めまして、そして電柱とか、あるいは畳の古いもの、そういったものを集めまして、何か所でも三、四体ずつ駅前であるいはその場で、火葬にしたようなことでございます。

それから、その中でまた困りましたのは、水に浮いておる、これは女の死体でございましたが、水を飲まれたのか、どうか知りませんが、大きくなっておられ、全然顔もわからないようにはれておられたのですが、その死体を上げようと思って、ひっぱってもどうしても上がってこない。これはおそらく片一方の足を、何かにはさまれておられるのであろう。しかし放つてはおけないから、申し訳ないけれどもここで火葬にしようというので、畳を付近から拾ってきまして、その死体の上に畳をのせまして、そして私も四、五人の者が、念仏を唱えながら、土を畳の上にかけました。結局こちらにもって帰ることができなかったような死体もあったのでございます。そういったように、死体の処理につきましては、非常に苦心をいたしました。その当時加勢していた

だいた方々は、どんなにかご苦労なされたかと思うのでございますが、それにつきましても、私がつくづく思いますことは、田村助役さんが私がいくら早く出勤いたしましたしても、それよりも早くあの石段に立っておられたということは、いかにこの応急処理に対して、お力をいただいたかということが、私頭の中に残っておるのでございます。そのほか、いろいろ死体処理につきましては、非常に困ったのでございますが、先ほどもお話がありましたが、百何体かありました死体が結局青物市場と新庁舎のうちに保管してありました。だんだん臭いは出てくるし、どうしても取りに来られる方がありませんので、涙をのんでその青物市場のちよつと向こうの、末広さんがおられるあの付近でございますが、宮川さんのうちの畑を借りまして、そこで合同の火葬をいたしましたのでございます。そのときにも宮川さんは、その翌々日私のところに来られまして、「厚生課長、だれの許可を得てうちの畑で火葬をしたのか」というようなことで、非常にどなつてこられたわけでございますが、「お宅のほうへはご了解いただくようお願いをいたしましたのでございましたが、大へん相済みませんでした。みんな私の責任ですから」といいましたら「まああなたが責任者ならしうがない」ということで、懇意なものでありましたので、ご了解をいただいたのでございます。末広さんもお承知と思いますが、その後もあそこからお骨が出たりなんかして困られるということがございます。そういったことでやむを得ないものは火葬にいたしました。また結局こちらへ運ぶことができないものは、そこで犬の子を扱うような形で処理をいたしました

た。戦争というものの恐しさを非常に、私痛切に感じたのでございます。そのほかいろいろ困ったこともございますが、私ばかり申し上げてもなんですから。大体以上のようなことで

○沖井 私、これに関連してですね、福本さんあたりが、当時、団長の助役さんあたりがずいぶんお骨折りをされましたけれども、この問題で一番大きなことはやはり死体の処理、あるいはその悲惨な状態、それをどうしても書かなければならない死亡診断書ですね。はじめの二、三日は大へんでしたけれども、その後また出てくる、また出てくる。私が一筆書かんと処理できない。

これについておもしろいことがあるんですけども、もしなんでしょうたら取り消して、ご相談していただいたらいいんですが。あなたがずいぶんお骨折りになってね。四日、五日、一週間もたつて死体が出てくるともう焼く人がいないのです。あれを思い出しておいでかれないが、私のところに、呉工業が、敗戦になって二、三日して「先生、お別れにアルコールをもってきました」私は「玄関のほうに置いてくれ」といいましたら置きましたよというから行ってみるとごぼつと音がする。ドラム管一本にアルコールがはいっている。これは大へんなものをもらったなあと思んだのですがね。それから課長さんがおいになります、もうみんな動かないものですか私の所においてになって飲ますと喜んで働くんですね。あれは質のいいアルコールでしたよ。それを分けてくれんかということで分けてあげたんですがね。それで私はその方面で協力したわけですね。その当時私の記憶では百五十人の死体処理検案書、爆死とか圧死とかいう名で、いろいろ

ろ詳しいなんはいらずにすんだから、あれでよかったんですがね。

○田村 あれは沖井さんなんですかね。駅で停車中の汽車の中で死んだのが非常に多かったと思うんですよ。

○沖重 あれはほとんど爆風で死んでいましたね。私は汽車の中を歩きましたがほとんど死んでいましたね。

○田村 あれは何百人かおったね。

○沖重 だいぶ鉄道も片づけておりますよ。それで、いまアルコールの話が出ましたが、それが弱った。また砂糖の問題もさつき出しましたが、あの砂糖で弱ったんです。私は。爆撃が済んだら終戦でしょう。終戦処理を警防団がやれという。団長が「ここへかこうておけ」とね。この青物市場へね。それで砂糖からアルコールから各防空壕から警防団の仕事じゃと。それをまた盗むのおる。それに砂糖をくれ砂糖をくれと来られるんだね。あげていけず、あげなくていけず困った。黙っていたら監視がおらんうちに盗めという。弱ったですよこれには。それで晩には寝られんですよ。私のほうは責任があるから。

○田村 あれは大きな四百本からあったねえ。

○沖重 あるの、あるの、少々あるんじゃないのです。それから一番困ったのは、県の調査課が来ましてね。ここで軍事物資の接収をやったが数が足らん。数が足らんから数をどうして合わせた

らしいか。盗人が来たといわれず、とられたといわれず。とにかく陸軍燃料廠から持って戻ったのはこれだけしかないんだからこれでとってくれといってもらいましたが、とうとう私は警察ぎたにまでなつて、西村市長に私にそれに既に死なれたんですがね。波羅天さんあれも引っぱられて、あの物資の問題でね。ほんとにあの終戦には……。

○田村 あれから後にね。防空壕の機械、山の中はみな工場だった。その機械をみんな出せと。ところがその当時防空壕はつぶれそうだった。その中であれだけの機械をみんな出せと。それから今津の八幡さんの下にみな出しましたよ。ところが今度はそれを入れよといい出してね、この終戦には弱った。

○沖重 死体の話も大きな問題でしたな。

○秋田 死体の中で二つほど記憶にあるんですが、駅のほうに片づけに行ったときに鉄道は飴のようになつて曲がつておつたのです。その中に一人ほど大きな人が、紳士でしたが、それがこういうふうになつて汽車からはみ出しておつた。その下に金時計の、こんな大きな金時計がはいっていましたね、それが一つと、それから、ここへ持つて帰られた方に上等兵でしたが、それがまっすぐこうなつて、そのまま爆風で死んじやつたのです。その二つが記憶にあります。ほかにもたくさんありました。

○田村 あれは私も記憶にあるんですが、軍服のままでね爆風でからだははれてね、服がはり裂

けそうになっていた。

○秋田 怪我はないが身体が大きいのでまっすぐかえるのに弱つた。金時計だけは身についておる、こんな大ききですね。こういうふうになつて汽車からはみ出しておつたんですね。

○田村 死体をわれわれが整理するのに暑い最中だったし、二日目頃には手の皮がへげてなにかつくんですわ。

○沖重 陸軍燃料廠が爆撃におうたでしょう。その時分にトンネルの中に、尻が半分爆撃でないようになつておる。それがね、それから四年ぐらい手紙が来てましたよ。大阪の人です。さぐつてみりゃあけつがない。こりゃあどうするかというて、本人はようやく気が付いてまだ物をいよつた。こっちへ尋ねてまいりまして、どこのお医者さんにでもご厄介になつてましたね。

○秋田 それで治つたんですか。

○沖重 はい治つたんです。

○福本 あのとときも困つたんですが、あそこのトンネルの所で牛が一頭死にました。消防団が食べたんです。ところがその持ち主が私の所に来て厚生課長が許したんだらう。というてね。

○沖重 それは私知つてるんですが、食べたというよりあれは爆撃でやられて死んでおつた。それは団長がご存知です。それがね大きな牛ですがね、ばらばらになつておつた。「団長、牛が死んでいるがどうしましょうか。」といったらそれはしょうがない。ということだった、それで消毒を。

○田村 あれにこのほうの免許があるから、あれに片づけさせて

○沖重 それに私ら片づけるのに、団長に相談して、牛が死んだのはどういふものだろうか、それはしょうがないじゃないかということだね。

○福本 とったつもりはないんだ。それを消防団がとったといってね。

○沖重 汽車がちょうどまん中に止まっておる。消防団がそこまで自動車をもって行ったんです。道がないからトンネルをくぐって行く途中、助けてくれ、助けてくれというから行ってみりやあけつがない。汽車から降りて逃げようと思ったたらそこにもってきて爆撃でやられた。あなたもご存知だろうと思う。

○田村 トンネルの中で見えなかった。まっ暗で。

○沖重 私の所にありますね、礼状が。四年ぐらい寄こしてありましたよ。

○司会 皆さん、空前絶後の体験をしておられるのですが、先ほど野田さんの話にもありました。現在の多分ニューセントラルの上にありますお稲荷さんのことだと思いますが、そのようなこと、あるいは爆撃に関連して強烈なご印象もあると思うんですが、そういうようなことがありましたらついでに記録に残しておきたいと思うんですが。

○田村 あれはなんか、村田惣一さんあれが勇敢だった。死体の整理のときに、それとあなたの所に一人金子という東京から来た女と庶務にもう一人おった。その女の二人が恐れずに最後までや

ってくれました。それで東京に出たときに、あれが新橋のダンスホールかなんかにおるときいてそこへ私は尋ねて行ったことがある。

○福本 その人は岩国に親しい人がいるのを東京からわざわざ尋ねて来まして、仕事がないというので、それじゃ厚生課にはいつてもらおうというので。それが最後まで非常によくやってくれた。一つ困りましたのは、あれが辞めて東京へ帰りました後に、北海道の方だったと思うんですが、自分は遺族で来たんだけど、死体がここにあるはずだからというので帳簿をくつてみました。その方の亡くなられた方が帳簿に載っておるんです。それに三百円の資産があるというのが帳簿に載っておるんです。その三百円を返してくれといわれるんです。ところが帳簿にはあるけれども私のほうに引き継いだ人がいない。金子さんはいないし結局はお断わりをいって済ませてもらいましたが、そういったことがあるんですよ。

○田村 あの女と庶務に一人おった。

○秋田 あの女の人が遺留品の係だった。

○田村 一ぺんあれを尋ねようと思ってね、新橋の近くのダンスホールへおるといふので尋ねて行った。

○三上 大きな印象があるんですが。私は山の壕のところの、木の下に隠れておったわけですが、第一爆撃を受けて、それからしばらくすると何千の人かわかりませんが、起きては待避して突っ

込み、起きては待避して突っ込み、そうして山へ山へと、皆さんが来られた状況というのはいまもって忘れられません。そしてたどり着いたときには目のへりがまっ赤になっておった。土でベトベトにまっ黒くなって山へ向けて待避したあの瞬間はほんとうに生きるといふことか、あるいは逃げるということかとにかく私は忘れられません。あの光景は。実に波のごとく、ありのごとくこれが印象ですな。

○田村 田んぼの中に伏せたりしてね。

○三上 突っ込んで、そして爆撃をよけて、また立ってまた突っ込んで、この状況を山から見るとほんとうに。

○沖重 田の中に頭から突っ込む。

○沖井 爆撃されたのは陸燃とそれから航空隊とあれはどっちがどういう順序だったんですかね。

○沖重 陸燃が一番早い。

○秋田 陸燃が二回。

○沖重 陸燃が二回、あとが多かった。

○司会 徳山の海軍燃料廠、あれと岩国の陸燃と交互に向こうに落とし、こっち来て落としあればいつからか。

○末広 五月十日ですね。

○沖重 その次は徳山と交互にやった。航空隊はまだ早かった。それから市長が出んようになった。

○田村 グルグル回って市長が「やったやった」と手をたたき、スーと降りるでしょう。それを撃ち落としたと思ったんですね。

○沖重 グラマンが来た時は航空隊をやった。

○秋田 航空隊は徳山に基地があっただけです。それが爆撃されるとき、私どもは見ましたが地雷管がパツと破裂して、落とすたびにパツと三回ぐらい上がるんですね。それからさっき福本さんがいわれたように、あそこに運んだんですが

最後には六体残ったんです。六体をろうそくの灯をともして私どもは二人当て交代で寝ず番したわけです。

○沖井 負傷者が随分とうちへ来た。航空隊で足を落とした者やいろいろありまして、それで手いっぱいだね。ほかのことをするわけにもいかん。白井君とばかりとあまりおらなかったですね。

○沖重 あんたの所が一番患者が多かったでしょう。皆んなもっていったから。ほかに外科医者がいないから。

○沖井 水はないし、あれは困りましたけど。ぶっ通しでね。

○福本 私のところも沖井先生のところばかりだった。

○沖井 それから広島から歩いて来て、うちで治療を受けて南桑へ帰るといって。

○田村 国病から呼びましたが。

○沖重 連れに行きましたよ。それでね患者は沖井病院へ運ぶ。こっちは足らんから国病からも来てもらって、診断書を書いてもらったんです。

○高木 陸燃のときは私も働いておりましたがちょうど市役所側に、ここにあったのですが徳山からこっちに回って来た。ちょうどその項山の真上から何十とフラフラッと白いものが落ちる。パラパラッと。何だろうとその当時爆撃とはわからなかった。それがね、ちょうど陸燃へ落ちる。

○沖重 それがね、人間は爆弾が上から落とすと頭をこうやる。頭をこうやっても仕方がないのに、これも人間の心理ですね。あとから考えると不思議ですね。手ぐらいあったかてなんのことないけど……。団長は覚えておられると思うんですが、陸軍燃料廠が爆撃された時分に、第二回のときでしたか消防団が来たときに大叱かられました。あの火の中になんで飛び込むかというので叱られたことがあるんですがね。団長は途中まで行かれましたねえ。

○田村 トンネルにはいったんですよ。

○福本 陸燃のときは、四機の編隊です。四機が来まして最初の分が一号機と三号機が落とす。その次に二号機と四号機が落とす。ちょうど役所の裏側に丸太を並べておったんですが、その丸太の間から見るのによく見えるんです。みんな四機編隊です。

○秋田 斜めに落ちておりましたね。二階からみておりましたが。

○司会 進入方向は西の方向と聞いておるんですが、あるいは日本海の方からですと徳山の方からということになるんですがね。

○高木 ちょうどこの山の上です。西岩国の方向から……。

○福本 お城山のほうですね。

○沖重 この上で爆弾を落とすのがちょうど陸燃に行くんですね。

○沖井 城山あたりから新港方面ですね。

○沖重 陸燃が爆撃を受けた日に、ちょうど愛宕で二軒焼けたですね。うちは団員を二つに分けて愛宕の火を消して戻ったんです。

○福本 車一台あなたのところで貸して貰って、食糧をもって行っただけです。

○沖重 うちには使える車が二台しかなかったもんねえ。

○司会 それでは予定時間もまいりましたので一応これをもって閉会させていただきますが、本日のお会の主眼とするところは、田村先生もおっしゃいましたように、記録の保存というにございますので、皆さん方において「まだこういうことがあった」というようなことがございましたときは、簡単な記録の様式で総務課まで出していただけたらと思います。

なお、速記の整理は今後いたしますが、それもあるいは重複の部分ははずさせていただいたり、

さらに詳しくこのところを聞きたいということが私のほうでありましたら、皆さんのところへお伺いして補完するという形で記録にしたいと思いますので、その点は皆さんのご了承をお願いいたします。

また、本日の会合に出られなかったような方で、たとえば、鍛冶県議からも「きょうはたまたま県会があつて出られないけれども、記録的なものを書いて出すから」というようなことでありましたので、座談会を中心にした記録をできるだけ早く整理印刷して、皆さんへお届けする機会もあろうかと思っています。

それともう一点、本日全然触れなかったような警察署の記録とかあるいは保健所の記録とかもあるのではなからうかと思いますが、たまたま機構が警察とか保健所ということになりますと当時の人たちの移動その他でなかなか把握がたいということもあり、これは県まで行けばあるのかも知れませんが、そういう点も調査してみたいというふうに考えております。長時間にわたってお忙しいところどうもありがとうございます。

○三上　ちよつと駅前町の町内会の第一期の都市計画、そのときの戸数が百五軒という記憶がございますのでそれだけを。

(以上)

後　　記

二十五たびめぐり来る岩国駅前被爆者慰霊祭を前にこの小冊子を当時の一記録としてお届けします。

二時間の座談会でありましたので、多くを記録できませんでしたが、被爆の様子は大体わかりただけだと思います。この発刊をもって終わりとせず、これを手始めに、今後さらに正確な資料を集め、整理して、後世になく保存したいと思います。

この小冊子について、市民各位からのご意見を待つとともに、当時の経験や見聞を説明を付した資料として提供いただければ幸いです。(伊藤)

昭和20年8月14日の
岩国駅周辺被爆記録
(非売品)

昭和四十五年八月十四日発行
編集　岩国市総務部総務課
発行　岩　国　市　役　所
印刷　太陽印刷株式会社

○岩国市収蔵図書一覧（書名／著者・編者／出版社／発行年）

中央図書館

- 。岩国市史／瀬川 秀雄・ほか／岩国市／一九五七
- 。昭和二十年八月十四日の岩国駅周辺被爆記録／岩国市／岩国市／一九七〇
- 。岩国市史 下／岩国市史編纂委員会／岩国市／一九七一
- 。川下地区の干拓と災害記録／浜田 喜一／浜田 喜二／一九七六
- 。岩国駅いまむかし 岩国駅開業80周年記念／岩国駅 藤重勇／岩国駅長 中川正彦／一九七七
- 。岩国麻里布地区の干拓と災害誌／浜田 喜一／浜田 喜二／一九七八
- 。写真集明治・大正・昭和 岩国（ふるさとの思い出49）／大岡 昇／国書刊行会／一九七九
- 。日本都市戦災地図／第一復員省／原書房／一九八三
- 。ドキュメント写真集 日本大空襲／朝日新聞企画第一部／原書房／一九八五
- 。岩国空襲の記録／岩国・戦争体験を語り継ぐ会／岩国・戦争体験を語り継ぐ会／一九八六
- 。激動の岩国を生きる／岩国市立図書館／岩国市立図書館／一九八七
- 。母と子でみる日本の空襲／早乙女 勝元・土岐 島雄／草の根出版会／一九八八
- 。思い出の写真集いわくに／50周年記念誌編集委員会／岩国市／一九九〇
- 。空襲の時代を生きて／岩国空襲を語り継ぐ会／岩国空襲を語り継ぐ会／二〇〇九
- 。山口県空襲 警備隊引継書／井上 実智夫／井上 実智夫／二〇二一
- 。日本空襲の全貌／平塚 征緒／洋泉社／二〇一五
- 。アメリカが記録した山口県空襲／工藤 洋三／工藤 洋三／二〇二〇
- 。山口県空襲 増補版／井上 実智夫／井上 実智夫／二〇二一

岩国徴古館

- 。昭和二十年八月十四日の岩国駅周辺被爆記録／岩国市／岩国市／一九七〇
- 。岩国市史 下／岩国市史編纂委員会／岩国市／一九七一
- 。川下地区の干拓と災害記録／浜田 喜一／浜田 喜二／一九七六
- 。岩国駅いまむかし 岩国駅開業80周年記念／岩国駅 藤重勇／岩国駅長 中川正彦／一九七七
- 。岩国麻里布地区の干拓と災害誌／浜田 喜一／浜田 喜二／一九七八
- 。陸軍燃料廠史 岩国編／―／岩燃史編纂委員会／一九七九
- 。陸軍燃料廠史 別冊 岩国編／―／岩燃史編纂委員会／一九七九
- 。激動の岩国を生きる／岩国市立図書館／岩国市立図書館／一九八七
- 。ふるさと学習資料 柱島読本／岩国市立柱島小・中学校、ふるさと教育研究会／岩国市立柱島小・中学校／一九八九
- 。帝人製機五十年のあゆみ／帝人製機株式会社／帝人製機株式会社／一九九五
- 。目で見る岩国・柳井の100年／福本 幸夫・宮田 伊津美 監修／郷土出版社／一九九八
- 。和木町史／和木町史編纂委員会／和木町／二〇〇三
- 。岩国市史 史料編三 近代・現代／岩国市史編纂委員会／岩国市／二〇〇四
- 。岩国・柳井・大島・熊毛・玖珂の昭和／―／樹林舎／二〇二二

○用語説明（岩国市内の用語以外は『広辞苑第四版』より）

- 。岩国陸軍燃料廠（いわくにりくぐんねんりょうしょう）…巻頭写真P. 4参照。
- 。応召（おうしょう）…在郷軍人が召集に応じて指定の地に参集すること。
- 。グラマン（ぐらまん）…アメリカの艦上戦闘機。
- 。警防団（けいぼうだん）…消防組と防護団とを統合した団体。
- 。工廠（こうしょう）…軍に直属し、兵器・弾薬を製造する工場。
- 。四境の役（しきょうのえき）…1866年、和木町等四か所で起こった幕府征長軍と長州軍の戦闘。

- 。市纂（しさん）…市に関する資料を集めて編集すること。
- 。出征（しゅっせい）…軍隊の一員として戦地に行くこと。
- 。助役（じょやく）…市町村長を補佐し、その職務を代理する。
- 。人絹・人絹町（じんけん・じんけんまち）…現在の東地区の事。
- 。接収（せっしゅう）…権力機関がその必要上、強制的に人民の所有物を収受をもって取り上げること。
- 。大八車（だいはちぐるま）…荷物運搬用の大きな二輪車で二～三人で引くもの。
- 。鳶口（とびぐち）…棒の端にトビのくちばしのような鉄製の鉤をつけたもの。物を引っかけて運んだり壊したりするのに用いる具。
- 。寝棺（ねかん）…死骸を仰臥のままに納める棺。
- 。B二十九（びーにじゅうく）…アメリカの大型戦略爆撃機。
- 。復員（ふくいん）…召集を解かれた兵士が帰郷すること。
- 。防空壕（ぼうくうごう）…空襲の際に待避するため、地を掘って作った穴や構造物。

出典

新村出編、広辞苑第四版、岩波書店、1955、P. 315、P. 794、P. 865、P. 1237、P. 1303、P. 1444、P. 1554、P. 1861、P. 1985、P. 2227、P. 2332

表紙・裏表紙解説

●爆弾穴（昭和二十年頃・所蔵Ⅱ岩国徴古館）※表紙

大空襲の爪あとしとして、岩国駅周辺には無数の爆弾穴が広がっていた。駅周辺は戦後、着実に復興し、現在の中心市街地を形成していった。

●平和記念碑（乙女の像）※裏表紙

昭和三十四年、岩国駅前のロータリーに慰霊塔が建立され、その中に像があった。その後、平成五年に麻里布第三公園の入口に像のみが移され、令和二年に再度、岩国駅前に移された。

この碑は、岩国駅周辺の空襲による犠牲者の冥福を祈念するとともに、この事実を後世へ伝え、恒久平和への願いを込めて建立されたものである。

『戦後八十年記録ゝ語り継ぐ、岩国の記憶』

昭和二十年八月十四日の岩国駅周辺被爆記録（復刻版）

令和七年八月 発行

発行・編集 岩国市

印刷 有限会社アウルズコーポレーション

作成協力 丹美写真スタジオ 竹重 満憲

